

第 六 章

葬儀が滞りなく済んで、表立つた用務も殆ど無くなつたが、併し勝見家と弟子たちとの交渉は、それだけでは切れて了はしなかつた。それどころか、猶殆ど毎日のやうに、小野らは勝見家へ行つて、雑談半分に家用を足したり、未亡人や子供たちの相手をしたりして、益々親しくなつて行つた。殊に未亡人の提言に依つて、先生歿後の勝見家には、二人の少年の外、一人も男つ氣がないといふので、弟子の中の差支ない人が、一人づゝ宿直として、勝見家へ泊る事になつたので、交渉は益々深くならざるを得なかつた。勿論未亡人の手頼りとする男性として、先生の長兄に當る長三氏が、榎町の伯父さんと呼ばれて、——近所にはゐたが、晝間は早くから勝見家へ来てはくれるが、夜になると、必ず歸つて、自家へ泊らねばならぬ人だつた。だから何か萬一の場合に備ふるまでもなく、先生の遺骨を安置した、書齋の間を宿直すべき土が、必ず一人は必要だつた。其上良人を失つた未亡人として、深夜まで位牌を守るに就いては、相手なしには餘りに淋しい事だつた。それに未亡人は、元來からいつても、若い書生を部下に置いて愛護してやるといつたやうな一種の「姐御」氣性が多量に在つたので、さう云ひ出したのも無理はなかつた。さうしてそれにはもうそれぞれ一家を持つた、先輩の弟子たちは都合が悪かつた。それでまだ下宿にゐる小野だとか、黒田だとか、林原だとか中山だとか、杉浦などが順々に、日を定めて當直することになつた。

「あ、冬子さん。」夫人が突然傍から云つた。「箸から箸へちかに拾つて貰つてはいけないんですよ。」

「あら、さう？」

冬子は箸を慌て、引いた。

小野は自分が叱責されたやうに、心中ひそかに赤くなつた。そしてかういふ際にも、ひそかに卑しい考へ——といふ程でないにしても、他の雑念を持つことを、先生に對しても濟まないと思つた。そして今度は専念に、先生のことのみ思ひながら、骨を見出すやうに努めざるを得なかつた。人々の手に依つて、骨片は殆ど拾ひ盡された。と、それを待つてゐたやうに、又隠亡は現はれて、と云ひながら、それを大きな灰篩に入れた。篩の底にはまだ小さな骨片が、手で掬へる位残つた。隠亡はそれを甕の中へあけると、少し嵩ばつて蓋が出来ないのを、無理に押し潰して蓋を被せた。もう隠亡の所業には馴れてはゐたが、小野の胸は又少し痛んだ。

それで骨上げは済んだ。

歸りの自動車には、小野たちの間へ、骨壺を携へた新太郎少年が、割り込んで乗つた。それで恰も四天王のやうに、遺骨を護衛してゐる形になつたに拘らず、少年の快活な言動は、車内を往きより一層賑かにした。

強ひて拵へた悲しみの面などを、故先生は喜ぶべき筈もなかつた。併しながら小野には、今日の悲しかるべき骨上げが、何ものかのために、何となく楽しいやうな氣がしたのを、道々先生に濟まなく思はない譯には行かなかつた。

小野は初め葬用が終つて了へば、もうなかく勝見家へなぞは遊びに来たりすることが出来ないものと思つてゐた。殊に彼は、勝見家の人たちは、もとく親しくしてゐたのでなくて、先生の死に依つて初めて交ることが出来たのだから、その後の用事さへ濟めば、もう元のやうに、先生の死に時々出入し得る外、家人とは何らの交渉もなくなるだらうと、ひそかにそれを物足りなく思つてゐた。田か誰かゞそれだけでは物足りないから、先生生前の定めを通り、毎木曜日毎に有志のものだけでも集まることにしたいと云ひ出した時、第一に賛成したのも彼だつた。さうすれば一日でも多く、勝見家の家庭に、蔭ながらも近づき得るやうな、ひそかな希望があるからだつた。——高等學校の寄宿舎から、大學以來の下宿住居、その素淡たる數年の生活に、彼は家庭の暖かみといふやうなもの、華やかな夫人令嬢の空氣といふやうなものに、飢ゑてゐた。さうして此の葬送前後の、十數日に垣間見えた勝見家の景圍氣といふやうなものも、彼にとつてはもう忘れられないものだつた。だから彼はその未亡人が、宿直を提言した時も、恐らく外の誰よりも、一番喜び迎へたに違ひなかつた。

先生の遺骨を守つて書齋に宿直すべき順番は、さし當つて十二月二十九日の埋骨式當日まで、それ／＼人々に割當てられて、茶の間の隅に貼り出されてあつた。小野はそれを仰ぎ見ては、自分が天晴れて勝見家へ、泊り得る順番の來るのを、ひそかに指折り數へる思ひだつた。併しそれも、さうからうといふので、誰云ふとなく親しい人の當番の時には、一人二人別な有志の應援が、同じく當直することになつた。泊らないまでも、電車の無くなる頃まで話し耽るのを常とするやうになつた。だから當番の廻つて來るのは、五日か一週間に一度位に當つても、殆ど隔日位には、勝見家へ出入する

機会を、小野たちは與へられた譯だつた。即ち小野は黒田の時も、杉浦の時も遊びに行つて、夜更けまで話し込んだり、時とすると一緒に泊つたりした。殊に親しい杉浦の當番の時、又小野が當番の時、必ず二人は一緒に行動を共にしてゐた。で、彼は事實、其當座殆ど毎日、勝見家に顔を出さない折としては無い位だつた。

従つて小野等と勝見家の人たちは、僅かばかりの間に、非常に親しくなつて了つた。知るのが遅かつた代りに、親しむのは急だつた。或意味で彼らは、他の弟子たちの誰よりも、今では勝見家に近しいものになつて了つた。親しいといへば勿論、昔から出入してゐる、先輩の大寺氏などを最とすべきものではあつた。が、併し氏は何といつても、今ではもう大人だつた。そして表だつた重要な用件とか、其他の大問題では其後の勝見家に殆ど執事めいた親しさで出入してゐたが、併し眞に家族たちにとつて、親しい伴侶ではなかつた。そこへ行くとき小野たちは、直ちに未亡人の遠慮なき話相手であり、令嬢や令息たちの無邪氣な遊び仲間であつた。「執權職」彼らは大寺氏を冗談にさう呼んで、少しは敬遠の氣味でさへあつた。さうして自分たちが寧ろ家族を慰めるべき、眞の親近者のやうにさへ自負するに至つて來た。小野のさう野望を唆る程ではないが、ひそかに希望してゐた境地は、可なり早く來たのだつた。事實彼はまだ、それ以上何ら、目標としてゐたといふ程の、野心などは抱いてゐる譯ではなかつた。たゞ先生の遺族に親しみ得る、その一種の光榮の思ひと、又その家庭的な空氣の中に入り得る、仄かな楽しい思ひの外には、まだ求むるものとはなかつた。で、彼はそれだけで、可なり満足の日々を暮してゐた。

令嬢や令息たちとは、もう冗談を云ひ合つたり、揶揄たりする位まで、すぐ友達仲間になつて了つた。そして一兩日小野が、勝見家を訪れるのを、少し遠慮してゐたりすると、下宿に電話のある便

宜から、小野の處へ來いと促して寄越す程、親しい仲になつて了つた。或時などは、又冬子嬢からの電話で、ひそかに心を躍らしたことも、一再ならずあつた。勝見家からの電話といふので、まさかと思ひながら出てみると、受話器に涼れたながらに、少し低め勝ちな濕ひのある中音が「甘え」を交へた抑揚で、慎ましくやかに響く。……

「小野さん！……私よ。解つて。私よ。……」

彼女はいつもさう云ふのだつた。

「あゝさうですか。どうも……」

彼は胸の血が、ふいに嵩まるのを覺えながら、望るやうな息を呑み込んで、恐縮して言葉を知らずに答へるのだつた。

「あの、今、何をしてゐらつしやるの。」

「今ですか。」小野はやつと喉の奥から、聲を筒抜けさせるやうに喘ぐ息を押へて、平靜らしく答へるのだつた。「今、あの、『新文藝』から頼まれた、談話筆記を清書してゐるんですが、……何か御用ですか。」

彼は其頃、『新文藝』が先生の追悼號を出すに就て、その編輯者から依頼され、先生の學友や知己を訪ねて、傳記的な追憶の談話筆記をとつて歩いてゐた。それは『新文藝』の編輯者から、弟子どものうちの閑な若い人に、との依頼だつたのを、誰も其面倒な、さうした雑誌記者の下つ端がするやうな仕事を、喜んで引受けるものがなかつたので、小野は幾らか進んで引受けたのだつた。そのため彼は先輩のうちでも、殊に藝術家的な見榮坊である大寺氏などから、「彼奴は將來作家として立つなら、もつとそれに矜りと自信とを持つてゐべきなのに、あんな屈辱的な仕事をする。あんなことぢや駄目だ

ね。」といふやうなことさへ蔭ながら云はれてゐた。けれども小野としては、此際先生の生前の偉を出來るだけ正確に世間に傳へて置くやうに努力するのも、故先生に對する一種の御恩報じのやうに感じて、喜んでそれに従事してゐたのだつた。彼にとつては藝術家の誇りなどは、この際問題とするに足りなかつた。何か先生のために盡し得るなら、それで満足だと思つてゐた。併しその心のうちには、故先生に對する死後の、少し常軌を逸した感激と共に、又勝見家の遺族に對して、心盡しを見せたいためでもあつた。殊にはその傳記的材料に就いて、何か疑義を生じた場合、それを聞くのを口實として何時でも勝見家へ出入し得る事をも、彼は餘徳として考へに入れてゐた。非難されるとすれば、寧ろそんな點でなければならなかつた。——今彼は電話で、其事を冬子嬢に云つたのだつた。

「さう？ ぢやあそれがお済みになつたら、遊びにいらつしやいな。今、黒田さんが來てゐらつしやるのよ。だからお閑だつたら、お母さんが貴方にいらつしやいつて。——それにね、みんなトラムプをしたいつて貴方が來るのを待つてゐるのよ。だつて黒田さんは、お母さまとお話ばかりしてゐるんですよ。成るだけ早くいらつしやいな。よかつたら杉浦さんもお連れになつて、ね。」

「えゝ、畏まりました。もう二三枚書けばいゝんですから、すぐ参ります。それに先生が四國に居た時代のごとく、少しお母さまにお訊ねしたいこともありまから……」

彼は何か氣がさして、さうした口實のやうなことを、そんな際でも云はずにゐられなかつた。彼の心に潜在してゐる戀の芽は、かうして毎日勝見家を訪問するのを、何ものにか對して、濟まないと感じさせてゐたに違ひない。

「さう？ ぢやあ早くいらつしやいな。きつとよ。……さよなら。」

さういふ電話を、彼は何かもつと云ひたげな、併し何も云へないやうな思ひで、残り惜しく切るの

であつた。

そんな風で毎日訪れる勝見家では、子供たちと一緒に、前にも云つた通りよくトラムプをした。それは令嬢と令息が全部集まつて、新太郎淳二の二少年にも出来る二十一銀行といふのをやるのだつた。親の銀行になる人が、子の借方になる人々に、札を二枚づゝ撒いて、其札に應じて金——勿論古トラムプを紙幣として、——を賭けさせ、その後銀行自身の札を置いて何方か點數の二十一に近い方が、勝つてその賭金を取るのだつたが、かうして銀行が借方の金をすつかり取りあげて了ふか、借方が銀行の金をすつかり取出して、破産させて了ふか、それが結局の勝敗になるのだつた。だから殆ど手練といふよりも、偶然に支配されるだけ、誰にも出来る遊戯だつた。たゞどうしても銀行になれば、何時かは破産するのが常だつた。が、銀行や借方に、規定の金は無くなつても、何か身につけてゐるものをも一つ抵當として渡せば、最後の身の皮を脱ぐ迄、破産を免れることになつてゐた。年上の役として、長女の冬子嬢と次女の定子嬢とは、よく組んで銀行の方に廻つた。人數が多いので、親は二人づゝ組んで銀行になることに定めてゐたのだつた。そして子の借方には、末の二人の令嬢や、令嬢の智恵子嬢や、令息の二人や、小野と杉浦などが控へた。

勝負は全く時の運だつた。が、併し、よからうと思つた時に、思ひ切つて多額の金を賭ければ、もし萬一負ければ素寒貧になる代り、一舉にして銀行の方から金を取ることが出来た。で、其度胸が幾らか勝敗を早めるに役立つた。令嬢たちは愾なく、勝つと定つてゐる時でも、ある安全な少額を賭けるのが常だつた。が、小野と杉浦とは、負けさうな時でも可なり大きな額を、平氣で賭けて遣り取りしてゐた。それで彼らが當れば銀行の産は忽ち傾き、又外れれば忽ちに、何か身につけてゐるものを抵當に入れなければならぬやうになるのが常だつた。が、彼らは結局、強氣で押し通して勝つ

のだつた。

其時も、小野と杉浦とは、初め五六度やつてゐるうちに、持つてゐた金札はすつかり磨つて了つて、財布を取り出して抵當に入れたり、名刺入から名刺を抜き出して、紙幣の代りに費つたり、それでも足りなくなつて来て、帯皮を外したり、寒いのにわざと上衣を脱いだりして、眞つ裸になるまで止めぬなどと負惜しみを云つてゐたが、其うちに又十度足らずやつてゐると、だん／＼それらを恢復して来て、今度は逆に銀行の方から抵當物を取るやうになつて来た。

「あら、困るわ。又負けよ。」

自分の方の札を開き終つて、冬子嬢が妹を顧みて云つた。

「又敗けの綱ですか。」と、小野は月並な洒落を云つて擲揄つた。「ぢやあ一つ冬子さんの片腕でも切つて戴きますか。」

「あら厭アよ。まだ抵當なら澤山あるわ。」

「猶いわねえ。」次女も共に助手として叫ぶのだつた。「さう何度も、二十一が續けて付くなんてことはないわ。きつと猶をするのよ。」

「そんなことがあるのですか。貴女がたの方でわざ／＼撒いて下すつたんぢやありませんか。」杉浦も此方に味方して、わざと毒々しく云つた。「愚圖々々言はずにその帯止めでも解いて寄越したらどうです。」

「まア待つてゐらつしやい。今すぐ上げますから。——定子さん。貴女鳥渡今のうちにお憚りに行つていらつしやい。ね。」と、冬子嬢は傍の定子嬢に何か耳許で小聲に囁いた。「よくつて。」

「えー。ぢやあ鳥渡行つて来るわ。」

「何です、定子さん。何處へいらつしやるんです。貴女がたの方が、よつぽと猾いぢやありませんか。」

「あら、ほんとにお憚りに行くのよ。ほんとよ。」と、まだ無邪氣な快活さの抜けない彼女の懐中に、自分ならお憚りまでついていらつしやい！」

「まア……。」冬子嬢はさすがに、憤りめかして呆れながら微笑んだ。

「よウし。」併し杉浦は、そんなことで敗けてゐなかつた。「そんならほんとに付いて行きますよ。」と、

と、冬子嬢は、さすがについて来られでも思つて、逃げ出しながら云つた。

「あら、厭よ。ほんたうよ。ほんたうだから、ついて来たりなすつちや厭よ。」

と、彼女は急いで部屋を出て行つて了つた。それを追ひかけて行く程、さすがに彼らも悪戯ではなかつた。

「さあ、早く拂つて下さ。」

その代り彼らは冬子嬢に要求した。

「待つてゐらつしやい。今、會計係がゐないぢやないの。すぐだわ。」

其うちに、憚りへ行つた筈の冬子嬢が、嬉々として笑ひながら其處へ入つて来た。見ると彼女の懐中には、赤い鹽瀬の財布や、金襴の笥など、一ぱいに喰み出して填められてあつた。手で抑へてゐる袂にも何か入れてゐるらしかつた。さうして両手の指には、玩具のやうな指環が、指一ぱいに幾つも

挿められてあつた。それには小野も杉浦も、咎めるより何より、非常な愉快を感じて、笑はざるを得なかつた。

「さあ、お姉さま。幾ら拂ふの。もう幾らでも拂つて上げるわよ。」

冬子嬢は得意になつて言ふのだつた。

「小野さんに百圓、杉浦さんに八十圓よ、みんな澤山賭け過ぎるんですもの。」

「それやお勝つと定まれば、全財産だつて賭けますよ。是でもまだ可哀さうだから、容赦して上げたんですが、そんなに抵當を仕入れて来たんなら、今度からはもつと遠慮なんぞしませんよ。」

「いゝことよ。もう敗けやしないから、すぐ取返して上げるわ。」冬子嬢は云つた。「さあ、拂つて上げてよ。この時計は小野さん。百圓ぢや安い位だわ。それからこの指環が杉浦さん。これでもダイヤ入りよ。いゝでせう。それから新太郎ちゃんには、……貴方も二十圓なんて賭けたの、生意氣ね。仕方がないから、この髪針よ。」

かう云つて彼女は、袂から時計函を取出して、パチンと開きながら、中から女持の細い鎖のついた金の小型時計を掴み上げた。

小野はそれを掌に、下から上へ持ち上げるやうに受取つて、そして掌中に振るやうにしながら、金の感觸をしみじみ嬉しく覺えて云つた。

「有難う。でも、是、天ぶらでせう。百圓ぢやあちと高いな。」

「あら、嘘仰しや。」冬子嬢がすぐ抗辯した。「それ私のよ。去年十八になつた時の誕生日のお祝ひに、お母さんが服部で買つて下さつたのよ。それでもほんたうの金よ。」

「さうですか。そんならまあ勘辨しておきます。」

冬子嬢のと聞いて、小野は何となく嬉しさを心の奥に覚えながら、その金時計をそつと握りしめた後、ざら／＼とわざと内懐へ落し込んだ。

と、杉浦も指環を受取つて、同じやうに云ひ出した。

「小野のは正銘の金でも、此の指環の寶石は、ダイヤぢやないでせう。」

「ダイヤぢやないけれど、寶石はほんとの寶石よ。硝子ぢやないわ。だからそれだつて、貴方の抵當には高い位だわ。」

「これが、寶石なんぞ入つてゐないで、蒲鉾型のだと、まだ我慢するんですがね。」

杉浦は顔を赧めせず、只蔚然と微笑して、平氣でそんな冗談を云つた。小野は半ば羨望の思ひで無關心にそんな冗談を云ひ得る杉浦の態度と、それに應ずる令嬢の様子を顧みない譯には行かなかつた。

が、冬子嬢には其意味が、幸にして解らなかつたらしく、何の反應をも表はさなかつた。杉浦はこの指環を、自分の左の小指へ筈めた。そして一座は更に次の勝負に取りかゝつた。……かうして其時はたうとう、令嬢たちを破産せしめたのだつた。

かういふ光景は、彼らと令嬢令息との間に屢々在つた。さうして益々兩方の仲は、他意ない親しみを加ふるのであつた。

二

それから又、彼らは二少年の相手をして、よくゴム鞠のボールをやつた。

或時、裏の物置の前の細長い庭の空地で、小野と杉浦とは、少年たちと交る／＼、キヤツチボール

をし合つてゐた。が、受ける掌も小さく、投球の力もない少年たちは、結局彼らの相手にはならなかつた。彼らも初めは、丁寧に手柔かに、二人の少年に教へながら、投げたり受けたりしてゐたが、やがて少年たちは疲れて、そして中止してしまふと、後には小野と杉浦だけが恰もキヤツチボールの模範を示すやうに、二人で技を闘はすやうになつた。

その時丁度先刻から、裏庭での騒ぎを聞きつけて、令嬢たちも其處の臺所から、顔を出して見物してゐた。それで二人の球技は、自ら美姫の前で行ふ闘士の競争のやうに、更に赤熱せずにはゐなかつた。

二人は高等學校の寄宿舎にゐた時分から、ゴム鞠のベースボールには熟練してゐた。そしていつも二人がバッテリーとなつて、一つの紐を作つて協力して敵に當つてゐた。杉浦は投手で、小野は捕手だつた。そして二人の呼吸は、實にうまく合つてゐた。それで二人はよく、キヤツチボールの練習をし合つたものだつた。

今、彼らは其忘れかゝつた技倆を、思ひ出すやうに懸命になつて、球のやりとりを始めた。それは決して敵意を含んだ、競争的意識からばかりではなかつたが、さういふ遊戲にかゝると、彼らは不思議に熱して來た。杉浦も小野も、決して昔の技を忘れてはゐなかつた。肩がやゝ定つて、投球に油が乗つて來ると共に、軽いゴム球も可なりの速度で、ピユウ／＼と鳴る程に、彼らの指端を離れて飛び交うた。さうなつて來ると、キヤツチボールも身體が調子に乗つて働かぬために、少位置の高いや横のや、乃至はバウンドのも凡て、縦横無忌に捕へて逃さなかつた。殊に杉浦は昔から片手で巧みに球を捉へることが、人一倍すぐれて巧みだつた。彼は少し高い氣味の球は、殆ど皆片手を伸ばして飛飛ばし去が、手輕業的に受止めるのだつた。小野の投球が或時可なり高かつた。まると彼は忽ち身を躍

らして、見事にそれを手中に納めた。それで自信を得た彼は得意になつて其技を濫用し始めた。さう高くないのまで、片手で捕へようとした。そして其度に見事に成功して、見物の令息や令嬢たちの喝采を博し續けた。さうなつて來ると小野の方でも、敗けてはゐられなかつた。それで彼はさう得意でもないに拘らず、やはり一生懸命になつて、球を片手で捉へることに努力しなければならなかつた。併し彼は捕球にかけては、たゞ正確では在り得ても、さういふ離れ技は出来なかつた。小野は片手でつた。が、杉浦の方は相變らず、輕快に手を伸ばしてはまふと捉へてゐた。

ふと小野の心に、十度球を往復するうちに、どつちか過失しない方が、令嬢たちの好意を餘計得るといふやうな占を思ひ浮べた。そしてその同からひそかに十度計算して、其統計をとらうと思ひ立つた。——小野はそんな占兆めいたことを試みるのが、元から好きだつた。彼はよく町を歩いてゐても、今度から十五人目に會ふ人が、男か女かに依つて、自分の希つてゐることの吉凶を占つたり、又電車なんぞに乗つてゐる時だと、今度の停留所で乗る人数が、奇數か偶數かに依つて吉凶を判斷したりする癖が在つた。そしてそれを信じてゐる譯ではなかつたが、信しない譯でもなかつた。

一つ、二つと小野は心中ひそかに、十度の捕球を數へ始めた。彼だけはひそかに、一生懸命だつた。うっかり外したりしては、一生の吉凶にかゝる大事だつた。それで決して輕業なんぞせず、兩手で舞と受止めることにしてゐた。三つ、四つ、五つ、と過失なく進んだ。杉浦の方でも、まだ一つも逃さなかつた。と、六つ目の、眞つ直に來た何でもない球であつたに拘らず、彼は一種の油斷と、又そんなことを妙に考へてゐた一生懸命の餘りに生ずる心の隙のためか、彼は胸の處で受け取つた球を投げようとしてポロリと灑れ落して了つた。彼ははつと思つた。が、まだ一つ位なら、何でもないと思つた。其うちに杉浦の方でも、一つ位は落すに違ひないと思つた。が、七つ、八つ、九つと進んで小野もそれつきり落さなかつたが、杉浦も不思議に、九つ目まで落さずに了つた。さうして小野は其後すぐに、十の終りの球を受取つた。それも落さずに済んだ。が、その後で投すべき十目の球を、杉浦に過失なく受止められては、運勢は小野の方が凶いといふことになる。鳥渡彼は氣が氣でなかつたが、わざと球を杉浦の取れぬところへ投げて、強ひて外させるのでは、占の神聖も何もなく譯だつた。彼は咄嗟に決心して、難球ではあるが、捕へ得る範圍内にあるやうな意地の悪い球を、最後に一つ投じようと思つた。そして、少し左横に高目な球を、力を縮めて一つビュウと放つた。それは少し陰つた日影の中を、灰白い絲を曳いて、狙つたあたりへ飛んで行つた。

果然、杉浦はその球の方向を見定めると、身を斜に片手を伸ばして、高く飛び上つた。伸ばした手の空中に伸び切つたのと、球の通過とは同時だつた。小野は投げて了つた姿勢で、「あつ、捕つたな。」と思つた瞬間、受け止めた掌の音がして、球は其處から灑れ落ちなかつた。が、杉浦のその飛躍から身を地上に落した時、彼は、餘勢を食つてよろ／＼と横によろけた。そして其儘踏み止まり得ず其處から三尺ほど隔つた處にあつた、臺所の下水溝の中へ、ふら／＼と片足を踏み入れて了つた。さうして辛うじて手をついて身をとどめ得た。が、球は本能的に、彼の手から放さなかつた。見物してゐた令息や令嬢たちは、聲を揚げて喝采した。が、杉浦の足が、泥だらけになつて、引上げられたのを見ると、みんなその方に集まうて行つた。杉浦は少し跛足を引いた。

「どうした、どうした。」

小野も、自分の意識してやつた投球が、そんな結果になつたのを、ひそかに自責しながら、心配して近づいて行つた。

「何でも無い。片足つゝ込んだだけさ。洗へば何でも無い。」
 かう云つて杉浦は、すぐ裏手の方にあつた井戸端へ、片足飛びをして赴いた。そして其處の洗ひ桶の傍で、汚れた足袋を脱ぎ始めた。
 その様を見ると、一番先に、又一番近く寄つて来て、かう慰問するやうに言葉をかけたのは、當の冬子嬢だつた。

「何處もお怪我はなさらない。大丈夫？」

「え、大丈夫です。」

「あら、さうして足を出してゐらつしやい。私が水を掛けて上げますわ。私の肩へお摺りになつてもよくつてよ。」

「いえ、大丈夫です。有難う。」

かう云ひながら彼も、幾らか感謝の意を籠めて、一人立ちに片足をかゝけて、水を掛けて貰つてゐた。

「暴球を投げて悪かつたね。」

小野もその状を見ると、かう詫びながら、一種の羨望と嫉妬とで、たゞの親切に過ぎないには違ひないが、杉浦に對するその厚い好意を、ぢつと見てゐる外はなかつた。

「あら、お袴までこんなよ。早くお脱ぎなさい。私、洗つて差上げますから。」

「さうですか。どうも濟みません。つい、大車輪になつて飛びついたりしたもんですから……。」

彼女は更に彼の後へ廻つて、袴を脱ぐのを何かと手傳つてゐた。……

小野は改めて天意を試みたりしたのを、心から悔いなければならなかつた。さうしてその冬子嬢の

態度を、只の親切には違ひないと思ひながら、やはり杉浦に對する一種の嫉妬と、強敵意識とを持たざるを得なかつた。

三

かうして頻繁に、勝負家へ出入するにつれて、まだ初めて見た日から、十數日位しか経つてゐないのに、小野の心の中には、冬子嬢の姿がいつしか消え得ないものとなつて残つてゐた。が、併し彼はそれを全く秘めて、囁にも出さうとしなかつた。さうして彼は其儘秘め通して、押し殺さうとのみ努める外なかつた。

何故とならば彼女は、假りにも恩師の娘だつた。そして先生が在世ならば、逆も近づくのさへ許され得べき人ではなかつた。幾ら彼の方で思つたとて、まだ筆を以て身を立つるにも至らない、貧乏な書生上りの身が、その思ひを遂げ得る由などは、到底在るべからざるものと信じた。その謂めに似た心は、彼の謙遜から出たにもせよ、その當時は全く誇張なしに、彼にはさう思はれたのだつた。

その上、彼女に戀したとすれば、それは如何にも早かつた。先生が死んで、その死んだのを機會に、やうやく相知つたものが、その涙の未だ乾かぬうちに、先生の遺骨がまだ埋られぬうちに、その娘なる人に戀する。それでは餘りといへば餘りに早く、かつ死んだ先生の靈に對して、何といふ無義な非禮であらう。それを考へただけでも、彼は彼女に對する戀心を、思ひ切る外ないと思つた。

さうして最後には、彼の方で幾ら思つたとて、相手の令嬢の方で、少しも好意を持つてくれないものなら、初めから問題はないのであつた。彼は到底冬子嬢の方から、彼を戀して來るなぞとは、望んでも得られないことゝ、初めから信じてゐた。

が、併し、それは理性で信じて、彼の感情は、その萬一の場合を慮つてゐたのは事實だつた。そして向うから戀してくれぬまでも、幾らか此方の思慕に應じて、心を動かしてくれるだけの雅量があるならば、それだけでも有難い。そんな風にすらも彼は考へてゐた。

であるから彼は、自分の戀を一生懸命に、思ひ切らうと企てながらも、まだ其諦めに入り得ず、思ひをすて得ずにひそかに、冬子嬢の自分に對する態度を、觀察してゐなければならなかつた。彼女は果して自分に對して、何らの好意も持つてゐないのであらうか。自分に對しては、少しも心を動かしてはゐないのであらうか。さうだとすれば、すつかり思ひ切る外ない。秘め殺すより外はない。が、もしさうでないとするれば？ さうでないとするれば、それは別問題だ。……そこに一縷の望みがないではない。その一縷の望みが、彼を初めからすつかり思ひ切らせなかつた。

彼は冬子嬢の自分に對する態度を、初めから考へてみた。が、併しそれまでの態度では、幾ら自惚れて考へて見ても、先方が自分に戀してゐるとは、どうしても考へ得られなかつた。が、併し又それと同時に、彼女が自分に對して、絶対に好意を持つてゐないとは、幾ら謙遜して考へても、どうしても斷定し得られなかつた。さうして結局の所は、まだ雙方の状態が、其處まではつきり解るやうには進んでゐないのだ、と思ふしかなかつた。さうして更にその上には、彼女が少くとも自分に對して、ある親しきを持つてゐるだけは、明かだと思はない譯には行かなかつた。

彼は想ひ起した。彼が玄關から入つて行くと、いつもその聲を聞きつけて、いそぐと出迎へてくれる彼女を。それから又、彼に接する時のいつも寄り纏るやうな態度と、隔意のない笑顔。——それを思ふと彼も、心の底が稍暖かくなるやうな、まだ此の心を思ひ切るの早いやうな、中途半端な思慮に陥らざるを得なかつた。

「早く思ひ切れ。」いやく／＼時期を待て。『さういふ二つの言葉が、同時に彼の心の左右の耳へ、同じやうに囁かれた。が、併し意志の弱い彼には、その儘此の思ひを斷つて、無關心の境に入ることなどは、到底爲し得るところではなかつた。さうして彼の心は何時しかに、後者の囁きに耳を傾けてゐた。小野はひそかに戀する人の眼を以て、冬子嬢の一舉一動を見守つてゐた。そして幾らかでも自分に對して、好意ある態度を見せられると、ひそかなる喜びに血を沸かせてゐた。が、それとて、まだ親しみ以外の何ものでもなかつた。そしてさういふ親しきならば、彼以外の杉浦にも、又少し下つては黒田にさへ、示してゐるのを發見した。

時とするとその親しみは、寧ろ杉浦に厚いやうにさへ、思はれる時がないではなかつた。前に云つた捕球の際の、親切な介抱も、その一例だつた。そしてその他にも杉浦の後をついて、彼と話ばかりしてゐるやうに見える時もないではなかつた。で、小野に對しては、寧ろ杉浦の親友であるが故に、好意を傾つてゐるのではないかと、邪推されぬこともなかつた。が、併しさうかと思ふと、離れの部屋に一人小野がゐる時などは、わざ／＼そつと茶を持って來てくれたり、學校の本で分らなかつたりしたことを、特に彼を選んてたづねたり、彼女自身の性格上の弱點を、——それは心の中でかうと思つても、優柔不斷で甲斐性がないといふやうな月並なことだつたが、それを始終學校の先生にも云はれるといふことを、彼に一人で訴へたり、又學校の様子などを、彼に洩らしてくれたりする様子を見ると、すつと小野自身に對する方が親しきも好意も深いやうに、思はれるのであつた。それは實際何れとも、定め難いものであつた。

事實彼女も、何かの拍子に、こんなことを云つたことがあつた。

「……お母さまは眞方が、大變お氣に入りなのよ。私たちも眞方がたが誰よりも好きだわ。眞方も杉

浦さんも、ほんとにいい人ね。原田なんて貴方がたから見ると、ほんとに厭な人だわ。黒田さんも、さう好きといふ程ではないわ。」

「ぢやあ杉浦と僕と、どちらが好きですか。」

それを聞いた時、小野は冗談らしくかう云つて、ひそかに冬子嬢の顔を窺つた。彼の冗談らしく浮べた微笑は、作りつけのやうに頬に動かなくつた。そして彼自身かう聞いて了つてから、心の中で飛んでもないことを、聞いて了つたと一瞬間悔んだ。併し冬子嬢は殆どすぐ、別に重大らしくもなくすらくと答へてくれた。

「さうね。どつちも同じ位だわ。」

その答を聞くと、小野は再び悪い勇氣を恢復した。そして更に冗談を延長して、厭味交りに抑捺ひ半分反問した。併し彼の言葉は、妙にギョチない響を帯びた。

「でも、僕の前で兩方同じ位だといふ位なら、杉浦の方がもつとお好きなんでせう。」

「あら、そんなことはないわ。ほんとに同じ位よ。」

冬子嬢の答は、割合に無邪氣ですなほだつた。事實彼女とても、さう差別をつけて好悪する程、まだその當時心はつきりしないに違ひなかつた。

そんなことで小野の心は、まだ去就に迷はざるを得なかつた。そのうちに併し小野の心に、ある強い刺戟を與へるやうな、一つの交渉が冬子嬢との間に起つた。

それは實に、先生の遺骨を埋葬する前夜のことだつた。

その夜は先生の遺骨を、遺愛の書齋に置き得る最後の晩だといふので、門弟一同は、通夜の爲に勝見家へ集まつた。

例に依つて未亡人を中心として、書齋の處々に火鉢を擁して、二人三人づゝ集まり寄つた連中の間には、先生の追憶や、最近の文壇の諸問題や、色々な自己の経験談などが、賑かに語り始められてゐた。

小野はその前日から、當直で勝見家に泊つてゐたので、恰も幹事役のやうに、いろ／＼な斡旋を勤めなければならなかつた。それで遅れて席についたため、彼の割込むべき適當の座がなかつた。

と、向うの部屋の隅に、一つ炬燵が置いてあつて、其處には新太郎淳二の二少年や、小さい妹たちが、一緒に集まつてゐた。そしてその小さい家族たちは、小野を見ると、すぐかう呼びかけてくれた。

「おい、小野さん。此方へおいでよ。そして、何かして遊ばう。」

小野は仕方なしに、否、内心は喜びながら、其方へ寄つて行つた。

「ぢやア一つ悪少年どもの、お相手を勤めませうかな。」

「ふん、自分だつて不良青年の癖に。」

新太郎少年は云ひ返した。

「トラムプをしよう。」

淳二少年はすぐかう促した。

「トラムプ？　トラムプは駄目ですよ。今日はいけません。今日はそんな遊戯なんぞしないで、ぢやんとしてゐるんです。」

「ぢやアお嘸！」

「お嘸なら、僕は下手で駄目ですから、今に杉浦が來てからになさい。彼奴はうまいですよ。」

それを少し離れた座で、未亡人は聞き知つて、早速の話題にした。

「お喋つていへば大寺さんは、家の冬子たちが小さい時分、實にうまく嘲を拵へて、話して聞かせるのがお上手だつたわね。大寺は天才だつて、先生も褒めてゐましたよ。先生は割りに子供を相手に、そんな嘲なんぞするのは面倒がつてもゐたし、下手でしたからね。」

「さうでしたね。」大寺氏も、向うで口を曲げるやうにしながら、氣取つた柔しい聲を出して應じてゐた。「先生は大人を相手の座談はうまかつたけれど、何とか彼とか子供を相手に、即座のお伽噺を作るのは私の方が甘うござんしたねえ。けれど今ぢやあ、童話は佐々木の一手専賣になりましたよ。全く佐々木がお伽噺で、血路を開かうなどは思ひませんでしたかねえ。」

かう云つて氏は傍にゐる、佐々木氏の方を顧みた。佐々木氏は少し黒光りする額を上げ、眼を光らせながら微笑んで、フロックにつけたボヘミアン。ネクタイを、揺るやうに云つた。

「ふん。わしももう童話では、大家ぢやからのウ。あれも書いてみると、ずつと小説などよりは面白いし、仕事としても處女地を耕すやうなものだから、やり甲斐があると思つるとよ。」

「さうだね。」と、その先輩の一派の中で最も年長者めいた思想家の矢部氏が、ゆつくり腕を組むやうにして脂ぎつた溫柔な顔に、少し細めの眼を一座に放ちながら、結論するやうに云つた。「これからの兒童には、必然的に童話教育の必要があるからね。その點で佐々木の童話にも、美しい感情的の方面ばかりでなく、もつと新しい道徳を盛つたものが出来ると思つてゐるんだかね。」

「佐々木にそれを要求するのは無理だよ。」と、もう一人の先輩の、やつぱり同じ精緻な評論家として知られてゐる服部氏が、村夫子のやうに村直で謹嚴な所のある小さい顔に、少し凹み勝な澄んだ瞳を光らして、口を出した。「佐々木の小説にしても、昔から緻巧極まる感情の動きと、がぢがぢするとか

いふ、神經の顫動しか書かなかつた男だからね。」

「僕は又お伽噺などといふものからは、恐らく誰よりも遠い人間だね。」米田氏も最後に豊な頬に微笑を湛へて、快活正直さうに云つた。「書いたらさぞ不道徳なものが出るだらうな。一つ思ひ切つて書いてみようか。」

「昔々ある國の王様が、新しい女護ヶ島のお后と墮落して、鹽原の山の中へ道行をしたりするんぢやありませんか。」

黒田が無遠慮に、少し離れた處から揶揄したので、一座は忽ち哄笑に陥つて了つた。

そんなことを弟子たちが話し合つてゐる間に、令嬢や令息たちの方では、まだ何とか云つて小野にせがんでゐた。

「ぢやあ、杉浦さんが来るまで、何か君が話して、よウ。」

「いゝぢやないか、話したつて。何でもいゝからさ。」

「でも僕は駄目なんです。まアもうすぐ來ますから、お待ちなさい。それよりもヂヤン拳でもしませう。」

「ヂヤン拳なんて、語らないわねえ。」と、今度は一番末の令嬢までが口添へをし出した。

「どうして家のお兄さんは、まだ來ないの。」

彼女は杉浦に特別に懐いて、常に「お兄様」などと云つてゐるのだつた。「今に來ますよ。」と、小野が云つてゐるところへ、丁度杉浦が女中に導かれて、廊下を來るのが分つた。「そら、さう云つてゐるうちに來ました。」

杉浦は例に依つて濫い、黒い、併しながら人懐っこい圓顔を、その入口に現はした。

「あら眞實ね。お兄さん。」

第四女は無邪気に叫んだ。

「あ、杉浦さん、此方へおいでよ。」

少年たちも呼んだ。杉浦はその歡迎の言葉の中で、にやり／＼と笑つて立つてゐた。

「杉浦君。」米田氏もその様を見て、冷かすやうに云つた。「君は果報者だぜ。愛人の君を待つや久し。」

杉浦は苦笑して、炬燵の處へ寄つて来た。

小野は人氣をすつかり奪はれた形で、其處の半座を頷たねばならなかつた。が併し其處の座には、まだ年上の令嬢たちが、復習でもしてゐると見えて、現はれてゐないのが安心だつた。彼はどちらか

といへば、子供の傳などは得手ではなかつたので、結局それは幸でもあつた。

杉浦は直にせがまれて、何か出鱈目なお伽斬を、ぼつり／＼と話してゐた。

が、其うちに夜が更けてくると、弟子たちの方の談話は、益々榮えてくるに引換へて、子供たちは

みんな眠けになつて来た。そしてやがて半夜を過ぎる頃になると、令息や小さい令嬢たちは、仰しやるに違ひないから。」

と母に云はれて、寢室へ退くことになつた。

「ぢやア杉浦さん、君も一緒に来て、床の中でもつとお話をしておくれよ。」

その時杉浦は、かう二少年にせがまれて、幾らか迷惑さうだつたが、仕方がなく少年の寢室まで、従て行くことになつて了つた。

さうして小野が寢つた後の炬燵には、子供たちが去つた後、今度は奥から出て来た冬子嬢が、代つて寄つて来た。弟子たちの談話は、決して種の盡きることとはなかつた。そして益々色々な方面へ、賑かに榮えていつてゐた。

その中に在つて、小野は部屋の隅に離れて、偶然冬子嬢とさし向ひになつたまゝ、炬燵に倚つてゐるのだつた。さうなると彼はぢつと身が固くなるやうな、息が窒るやうな感じで、しかも表面飽く迄平靜に、何氣ない話をし合つたり、強ひて冗談を云つてみたりして、相手になつてゐる外なかつた。

夜は更けて来た。二人は其儘炬燵にあたつたきり、別に二人だけで話をし合ふこともないので、聞

くともなく一座の人々の談話に、それ／＼耳を傾けてゐた。やがて彼女は少し眠くなつたのか、炬燵に深く手をさし込んだまゝ、柔かい布團に頬を埋めて、顔を炬燵の上へ伏せた。と思ふと、彼女の差し伸べた手は、偶然のやうに、其處に入れてゐた小野の手へ、つと觸れた。小野はその軽い觸感に思はず一時手を引いた。何だか觸つてならぬものに、自ら觸りでもした如く、氣が咎めたのだつた。が、冬子嬢の方では、別にその手を引きもしないらしかつた。

で、小野は一寸胸を騒がしたが、別に冬子嬢の方に、何の反應もなげなのを見てとると、幾らか安心して、今度は炬燵の端の方へ、成るべく遠く離れたつもりで、恐る／＼手を差し入れてゐた。

と、冬子嬢は顔を伏せながら、炬燵の中へ入れてある手を、何かの拍子でもとるやうな工合に、指だけ動かしてゐたが、だん／＼それを端の方へずらして来て、又、ふと小野の手へ一寸觸つた。

今度は小野は引込めようと思つたが、ふと圖々しく思ひ直して、その儘にして置いた。ほんの一寸

した悪戯にもせよ、どうなるかとの興味もないではなかつた。すると一旦鳥渡觸れた冬子嬢の手は、その儘動かすのを休止した。と思ふ瞬間、小野の手の甲は、ふいに薄濡りのした柔かいもので、ぎゅつと蔽ふやうに握られた。小野の血は一度に、かつと胸へ集まるやうな気がした。と冬子嬢の方では、彼の手の甲を押へた手を、静かにそつと指の方へすらし始めた。そして息も吐かずにぎゅつと置いてある小野の手の、指の所まで来たと思ふと、小指だけを殘しうな暖かさ、それは小野の指頭を、殆ど一分時間天國に昇らしめた。

小野はもう、その手を少しも動かさず得なかつた。そしてそつと眼を上げて、前に向ひ合つてゐる彼女を、窺ひ見た。すると彼女は、相變らず顔を布團に伏せたまゝ、少しの身動きもしなかつた。彼女の常凡な束髪が膨れて、前髪が押潰されたやうになつてゐると、その眞ん中に鬘を描いた心が、複雑な組み口を見せて、大きく彼の眼に映つたきりだつた。顔は僅かに白いさう豊かでない頬が、耳朶の陰に輪廓をちらと仄見せてゐるきり、到底見ることは出来なかつた。

どういふ心持で、彼女は自分の手を握り締めてゐるのか、小野は彼女の見る由もない表情で、何ら得る所はなかつた。が、彼の血は湧き立つてゐた。少くともどんな小さな意味にもせよ、彼女が自分の手に意識的に觸れたといふことは、彼の若い血潮を掻き亂さずにはゐなかつた。

暫らくすると、彼女はすつとその手を引いた。そしてなほも炬燵檯の中央で、何かの拍子をとるやうに、微かに動かしてゐる様子だつた。それは又とりやうに依つては、彼女の手の在處をそつと小野に告げ知らして、觸れるのを誘ふかの如くにも思はれた。

小野は、ふと今度は、自分の方から彼女の指を押へてみようと思ひ立つた。そして、鳥渡暫らくの

間、色々と逡巡した揚句、思ひ切つて靜かに手をこらすと、二人の手は檯の眞ん中の邊で、柔かい弾力と共に果して打突かり合つた。小野はまた鳥渡逡巡した。が、彼女の手が、まだその儘に少しも取去られずにあるのを知ると、思ひ切つて急に手を動かし、彼女の甲と察するあたりを、軽く悪戯のやうに握つた。が、彼女はそれの儘何もせず握るに任せて、手も身動きもしなかつた。

やがてすぐ、何とはなしに気が咎められるので、小野はさりげなくその手を引いた。彼はもう眼の縁まで、熱くなるやうに感じた。そして彼女を正視し得ないやうな氣持で、同じやうに暫らく顔を伏せてゐた。

弟子たちの間の雑談は、益々眠氣を追い拂ふために、賑かさを加へてゐるらしかつた。時々黒田の甲ン高い聲が、一座を壓するやうに響いて、米田氏の無邪氣らしい笑聲が、その間を縫つた。何か米田氏は、その時女に關する失敗談を、懺悔めかして面白く話してゐるらしかつた。

杉浦もその座へ、もう子供たちの寢室から歸つて來てゐるが、炬燵へは來ないで、向うの末座のあたりに、獨り澁い微笑を洩らしながら、達觀したやうな顔付で、米田氏のあたりを眺めてゐた。

小野には殆どもうそれらの話は、耳に入らなかつた。そして彼はたゞその賑やかな笑聲を何ともいへないやうな胸奥の喜びで、祝ひの曲でもあるかのやうに聞いた。

その時以來、彼の決心は自から方向を變へた。

翌日、先生の遺骨は、生前愛してをられた雜司ヶ谷の墓地の、黃落し果てた銀杏の下、先生の愛児が眠つてゐる小さい墓の傍に、改めて埋葬せられた。

その悲しい埋骨式の間、併し、小野は時々前とは違ふ眼を以て、冬子嬢を眺め入るやうな瞬間を、ひそかに楽しんでゐたのであつた。心微しか冬子嬢の方でも、時々彼を顧みては、微笑を送るやうに

見えた。

先生に濟まない、と、幾ら心で思ひ返しても、彼はその人を見ることに依つて、楽しい埋骨式だつた。(あゝそれにつけても、後の酬いは當然でなければならぬ！)

四

その年の正月は他の如何なる年にも増して小野には、楽しい正月だつた。是まで数年の間、彼は樂しがるべき若き日の正月を、高等學校の寄宿舎か、下宿の狭い一室か、又は故郷へ歸つても、煤け切つた田舎住居の母一人の淋しい膝許で、索漠と過して來たのであつたが、その年は勝見家の未亡人が勧めてくれるまゝに、彼は大晦日の晩から泊つてゐて、三ヶ日を暖かい家庭の空氣の中に、喜びに満ちて暮すことが出來たのだ。

一夜明けると、令嬢たちは既に、美しい新春の粧ひを凝らしてゐた。髪こそ、山の手の家庭のことだから、いつもの束髪のままであつたが、着物はいづれも美々しい晴着をつけ、化粧もいつもより確かに念を入れたらしく、みんな頬を白々と輝かしてゐた。

冬子嬢は正式の裾模様ではなかつたが、齡に比較しては割に地味な紫紺地の、紋服らしいものを着てゐた。そして上に錦紗の、その同じ色合の少し紫勝つた浮織の羽織をきつちり纏うてゐた。彼女の顔は、白粉の乗りが少し悪くて、ほんのりボケたやうな感じを與へたが、それが却つてしつとりした、陰性な美しさを與へてゐた。その全體の割に地味な、慎しやかな姿は、二番目の定子嬢の、派手な型を置いた友禪模様と、やつぱり錦紗は錦紗だが、ずつと純紫色に近い色合の、明るい羽織をかけた晴れやかな姿と對照して、それ／＼年頃の處女的美を代表してゐるやうにもとれた。が、中でも殊に

好ましく見られたのは、第三番目の令嬢の、すんなりした少女姿だつた。彼女は、まだお下げに結つてゐたが、その服味のない洋風な編み方と、それから更に高尚な、形こそ大きく派手ではあるが、一番に松葉形を染め出した、紅なし友禪の羽織が、平素から小さい癖につんと澄ました、伶俐な美しい面立ちに、實に楚々たるいゝ調和を覺えさせた。

この令嬢たちに、同じく着飾つた令姪を加へると、急に家の中が、明るい色に満たされるやうだつた。小野はそれと立交つてゐて、驚に交つた鳥の悲哀を覺えながらも、又それらを眺めてゐるだけで、十分幸福なやうな氣がした。

彼は正月の衣裳としては、一張雜の焦茶の洋服を、着換へるべきものを持たなかつた。止むなく彼はネクタイだけを、新しいのに換へることにした。が、その色はやつぱり黒い、普通のネクタイに過ぎなかつた。

すると恰ももう彼の母の如く、いろ／＼世話をしてくれる未亡人が、目ざとくそれを認めた。そしてもう少し派手なのをなさいと云つて、先生が使つたネクタイの中から、黒地へ白い飛白の雲形を置いたやうな蝶結びのを一枚出してくれた。それは先生が倫敦から買つて來て愛用された古い品だとかで、古いとはいつても少しも痛んではゐず、又さう派手でもなく地味過ぎもしない、至極高尚なものだつた。

「あまり派手なもの可笑しいから、これが貴方には丁度いいわ。これになさい。」未亡人はかう云つて、蝶形に鳥渡疊んで小野の襟元へ當て／＼みたりした。

「でも、これだと僕には一人で結ばせませんかね。」小野はその好意に甘えて、そんなことを抗辯した。

「いゝぢやありませんか、結んで貰へば。——冬子、お前小野さんのネクタイを、鳥渡結んでお上げ。」

「あら、私にも結べるかどうか分らないわ。」

冬子嬢はさう云つて、併し悪びれずに小野の方へ近寄つた。

「なに、たゞ蝶結びにすればいゝんぢやないか。」

「どうも冬子さんにそんなことをして頂いちゃ悪いな。」

小野は未亡人のその言葉を、殊に嬉しくは聞いたけれど、何となくそんなことをして貰つてはムツ痒いやうな面映ゆさを覺えて、少し顔を赤めながら云つた。

「いゝえ。」

併し冬子嬢は、もう立つてゐる彼の傍へ寄つて来て、ちつとも顔は見ずに、彼の襟元に捲きつけたネクタイを一生懸命結び始めた。彼女の顔は彼の胸許に可なり近く、仄かに息づかひをしてゐた。そして目前に捲ぐ束髪からは、——それは近くで見ると、思ひの外に赤毛の感じがしたが、——かすかなく香油の匂ひが鼻を擗つた。小野はそれを注視してはならぬやうに、その顔を越えて彼方の座敷の隅を眺めてゐた。

ネクタイを結び終るには、鳥渡二三分の時間とはつた。その間彼は文字通りに頸を締められるやうな甘い痛さを襟越に覺えてゐたが、やがて彼女は結び終つたと見えて、少し離れて様子を見、更にもう一度歪んだ部分を直したらしく、

「これでよくつて。」

と、初めて小野の顔を仰いだ。

「え、有難うございました。それぢやあ毎朝、貴女のお手を煩はさなくちやなりませんね。」

小野は微笑して、冗談半分に云つた。

「え、そんなことなら毎朝して差上げますわ。」

それで小野は三ヶ日の間、朝起きて洋服をつける度毎に、必ず冬子嬢にそのネクタイを結んで貰つた。そしてその度に彼の胸許に、餘りに近くなる彼女の顔を、そつと見ぬふりをしなければならなかつた。

彼女等はよくピアノを鳴らした。が、小野たちが聞いてゐる處では、決して奏かうとはしなかつた。ひとりで稽古してゐるところへ、そつと入つてゆきでもすると、或時は中止して了つたり、或時は「厭よ。」と云つて追ひ拂はれたりした。冬子嬢は指に力があつて、可なり手はいゝのださうであるが、素人耳にもさう上手だとは云へなかつた。上の三人とも、双葉會へ稽古に通つてゐるのだが、まだいづれも初歩らしかつた。併し小野にはその彈奏は拙くとも、さういふ樂器に附帶した情調をひそかに享樂して満足だつた。近くにゐては聞けないが、夕方薄ぼんやりした先生の遺室にゐて、書棚の本などを亂抽して讀み散らしてゐたりすると、隣室で起るその響きは、いつの間にか彼を甘い空想の中へ誘ひ込んだ。

夜は訪ねて来る門弟や、その他の人々を、悉く網羅して、家中でカルタを取つた。小野はその遊びは不得手だつたが、それでも手先が敏捷なものだから、十枚位の知つてゐる札なら、可なり素早く取れた。そしてこれぞと狙つた札は、可なり敵のでもうまく抜くことが出来た。それで彼は下手の中でも、まあ手早い方の部らしかつた。それで二回やつて見ると、彼は案外冬子嬢と、好敵手であるのを發見した。彼女もさううまくはなかつた。初め二回目の時、彼は偶然冬子嬢と、相對して敵味方だつた。そして二三枚彼女の札を抜いた。そしたらその次の回には、彼女の方で、口惜しがつて、

挑戦して来て一二枚此方を取つた。が、それでも動もすれば、彼女の方が敗け氣味だったので、それは小野が自分の知つてゐる僅かな札を、選んででない所持たないせゐでもあつた。——彼女はどこまでも小野に、敵とさへなれば挑戦して来た。

遠く向うの方に離れてゐても、

「私、小野さんをどうしても敗かして上げるのよ。」

と宣言して、必ず向ひ側に座を占めた。

杉浦は稍小野より老練だつた。そしてその一團に在つては、必ず中心に主力として廻されてゐたので、その向ひへは又老練な、未亡人だとか近所の裁縫を頼みつけの女だとか、又は叔父さんの令息で、地方の高等學校へ行つてゐる圭ちゃんといふ人だのが、常に敵手となつてゐた。それで殆どいつも、小野は氣恥かしくなる位、冬子嬢と相對した。或夜は柳井が来て、その中に交つた。

そんなことで、この不得手な遊戯も、小野には割合に樂しかつた。殊に夜更けて食ふ、餅や蜜柑や、切り山椒などの味は、彼には沁々嬉しいものだつた。

こんなことの度重なるまゝに、彼の戀はだん／＼大きく育まれて行つた。

五

冬子嬢との親しみが増すと共に、小野は次第に、馨子未亡人の信頼をも、深く受けるやうになつて来た。未亡人は初めから、彼がてきばき物事を處して、骨身を惜まずに働くのを大變氣に入つてゐた。彼も亦、彼の恩師の遺族であり、しかもひそかに彼の愛する人の家のためには、何んな獻身的な努力を捧げても決して惜しまない積りだつたので、何事に依らず可なり忠實に、未亡人のために盡した。そして、未亡人の愛護を受ければ受ける程、それに酬いなければならぬと思つてゐた。

それで馨子夫人の用は、表向きの重大の用件は、もたら兄上の長三氏や大寺氏を煩はしても、細な手廻りの雑用や、鳥渡した家事上の話や、又は重大な用件の實務的な方面などは、彼が何かにつて命ぜられた、彼も亦それを夫人の信頼の結果だと思ふと、喜び樂しんでそれに従事した。

さういふ用件の一つであり、又小野に取つて、忘れられない意味の一つの役目が、その頃彼に依つてなされた。それは夫人の命により、勝見家の代理の使者として、先生の葬送その他に、導師の役を勤めてくれた鎌倉にゐた釋宗澤老師の許へ、布施の禮金を携へて行つたことであつた。

小野は鎌倉といふ土地も、可なり親しみ多い土地だつたので、或る日未亡人から一封の金子を白い袱紗包にして受取ると、いそ／＼と新橋から汽車に乗つて出掛けた。正月も半ば頃の、少し春めいた晴れた日だつた。

鎌倉の停車場に着くと、彼は老師の寺が圓覺寺と聞いてゐたので、何よりもまづ俵を雇つて、晴れた穏かな日影の中を、其方の方向に走らせた。彼はその途々この地にゐる柳井のことや、前に先生が死床に横はつてゐた時分、杉浦と一緒にこゝを訪れた時のことや、又今俵でその前を通つた八幡宮の鳩を捕へて来たことなどを、いろ／＼と思ひ出して、俵上に搖られてゐた。それからまだ一と月か二た月にもならぬのに、彼にはそれらのことが、何だか随分遠い昔のやうに思はれた。あの頃は、まだ澁石先生は死ななかつた。そしてその一家とも、まるで知らなかつた。しかるに今彼は、その先生の葬儀の禮金を携へて、今かうして使に行く途中である。そして殊にあの頃はまだ、冬子嬢の存在などは、まるで知らなかつた。

俵は建長寺の前を、左折して杉の下道へ入り、暫らくして爪先上りの要山の坂道にさしかゝつてゐる

た。晴れたとは云つても、谷戸の中なるそこらは、低い日影を處々に遮られて、しんと静まり返つてゐた。が、そこらの目を浴びた山の中腹や、黒い杉叢などに交つて、淺い緑を綴つてゐる竹林などが、穩かに暖かく眺められた。時々秋のやうなけたましましで、鴉や、鶉が啼いた。小野は何となく澄んつた緩い俣の進みを楽しんでゐた。

やがて俣は切通しの、岩を霏が冷たさうに垂れてゐるのを左右に見ながら、栗山の向う側へ下りた。そこらになつて來ると鎌倉も、もう寂靜を極めてゐた。そしていかにも寺境に近づくとやうな、氣持を覺えざるを得なかつた。

踏切を越して、まだ後圓覺寺までは、可なり遠かつた。が、彼は途々そのまだ見ぬ禪寺の様子を想像したり、途上の光景などを眺めて、いつか先生の『扉』の參禪の場面などを思ひ浮べて、——それが、確か建長寺の方だつたが、——さう退屈もしなかつた。途々に寺門や石燈などが多く眺められた。やがて俣は殆ど道の盡くる處の、杉並木の前へ止まつた。見るとそこは圓覺寺の山門の前だつた。處へ立入つて、案内を乞うた。が、その廣い土間に、彼の聲は可なり反響したに拘らず、誰も出て來なかつた。彼は二三度大聲に訪れた。が、幾ら待つても答へはなかつた。耳を澄まして奥の様子を窺つても、咳一つ洩れて來はしなかつた。彼は斷念してそこを立出づると、今度はその庫裡のもつと先の、人のあまうな方へ行つてみた。するとそこには果して、内玄關めいた入口の柱に、その宗派

そこで彼は又大聲を出して、二三度訪れた後に、一人の中年の禪僧が出て來るのを、やつと捉へる

ことが出來た。

「何ですか。」

その僧は入口の處へ出て來て、かう打切ら棒に聞き返した。

「釋宗禪……(と、彼は何と尊稱をつけて、呼んだものか一瞬間躊躇したが、素人らしく呼ぶに限ると思ひ直して)さんにお目にかゝりたいと思つて出ましたのですが、……」

「あゝ、老師ですか。老師ならこゝにはおませんよ……。」

僧はそれつきり、別に何とも後をつづけなかつた。

「では、何處にゐらつしやるのですか。」

「青林寺です。こゝへ來る途中の、右側にある三つ目の寺です。」

今度は幾らか丁寧に、所在をはつきり教へてくれた。

「さうですか。では失禮しました。有難うございます。」

小野は圓覺寺と聞いて來たのに、ではもう隱居して、別な院に居るのだなど咄嗟に察して、苦笑しながらそこを去つた。そしてそれもこの使命を果す上の、一興であると考へて、俣を再びもとへ返した。

果して、そこらの山腹に多い寺門と、そこまで續く石段との、數へて三つ目の處に、教へられた寺の名が、遠くからながらそれと察しられた。今度こそと思つて、彼は俣をすて、その高い石段を、急いで上つて行つた。

寺門は可なり古びてゐた。そして上へ上へ見ると、石燈を敷いて置かれた道の先で、思つたより小さい堂が、山を浴びて、寂然と立つてゐた。戸を鎖した、禪堂らしいものと、それと廊下

で連つてゐるらしい、もつと小さい堂、その横には更に又孫堂のやうに庫裡らしいものがついてゐた。小野はその庫裡の入口の方へ進んだ。と、そこを入つた土間に、玄關の上り框の横手の隅に、小さな鉦が一つ吊つてあつて、所用の方は此の鉦を鳴らされたし、と、傍に貼紙がしてあつた。小野は妙な嬉しさ、その音に對する妙な怖れとを抱きながら、一つ靜かに打つてみた。すると思つたよりも大きな、朗かな音が堂内に籠つて、玄關の中へ響いて行つた。

と、傍の控への間らしい、隣室から思つたよりもずつと近い、そして早速の「はい。」といふ返事が在つて、一人の年若い禪僧が、元氣よく立ち現はれた。

「あの、宗澤老師の——（と彼は今度はさう云つた。）——おゐでになるのは、此方の寺でございませうか。」

「さうです。何の御用でございませうか。」

その若い僧は、寧ろ在俗の書生のやうに、小野の世界と興りない、はつきりした應待ぶりを見せた。「隣見家から参つたものですが。」と、彼は早い方がいゝと思ひ、すぐ欲紗包と、禮狀を添へたものを差出して、そして云ひ足した、「甚だ失禮ではございませうけれど、是を老師に差上げて下さるやうにとのことでもございませう。」

「あゝ、さうですか。」と、若僧はすぐ呑み込んだらしく、「では鳥渡此方へ上つて、お待ちになつて下さいませ。只今、老師に申上げますから。」

かう云つて彼は、小野をその玄關の次の、彼らの控へてゐる茶の間みたいな狭い處へ通した。見るとそこには、圍爐裡が切つてあつて、大きな茶釜がかゝつてをり、鳥渡した茶道具などが、そこらに置いてあつた。そして向うの楯間を見ると、誰が書いたものか、読み難い假名交りで、「鐘を毀ちて錢

を鑄るの歌」といふ額が、呆けたやうに懸けられて在つた。

小野は老師に會はずとも、受取つたといふ返事さへ聞けば、その儘歸つてもいゝ氣でゐたが、こんな機會に、老師に會つて置けるなら、更にいゝと思つて待つてゐた。と、やがてその若僧は戻つて來て、

「では、どうぞ此方へ、老師がお目にかゝるさうですから。」

と請じてくれた。後からついて行くと、その廊下の奥の、一段高い中三階みtainな書院の横を開いた室の中に、どつしりと重い大きな机の前に、佛典や經書らしいものを積み重ねた書架を後にして、葬送の時遠くから見覚えてゐた老師が、虎の皮のやうな敷物の上に、厚い黒い座布團を敷いて端然と坐つてゐるのが見えた。

小野は入つて、そしてその關際で、一つ丁寧なお辭儀をした。近くで見ると、別にさほどとは思つてゐなかつた老師も、何だかひどく大きな人のやうに見えた。

「私は勝見家の使で参つたものでございますが、今度は色々とお世話をお願いしまして、甚だ失禮ではございますが、お禮の印までに差上がりましたやうな次第でございます。どうぞ呉々もよろしくのととでございませう。」

老師はさう畏まつて、小野が辛くも挨拶するのを、別にさう氣にも止めず、聞き流してゐるやうだつた。

「あゝ、さうですか。それは御苦勞でした。まあもつと此方へ寄つて、その座布團をお敷きなさい。」

「有難うございます。では、頂きます。」

言葉は丁寧ながら、小野はもう却つて、かういふ老師の前などでは遠慮するのが失禮と考へて、す

ぐその方に驟り進んで、殆ど部屋一ぱいに敷いてある、いろ／＼な獣の皮の一つへ、更に浮すやうに置かれた座布團へ、恭しく膝を載せた。さすがに端座は崩せなかつた。

益々近寄つて見ると、老師は口の大きな、何となく老獪な政治家のやうな感じのする、腕みのきる禪味とか何とかいふ、脱俗した近づき難いものでなくて、平々淡淡々としてゐるのが、大變彼に心易い感じを興へた。——それがやつぱり禪の至境なのかなと、彼は却つてひそかに敬服した位だつた。

「貴方は、勝見家とどういふ關係のお方ですか。」

老師はそんなことから問ひ始めた。何でも初めは、誰か家人の一人と思つたらしかつた。

「澗石先生の弟子でございます。」

「さうですか。では、どこか學校の先生でもしてゐられるのかな。」

「いえ、まだはつきりさういふ本職が定つてをりませんので、まあ書けたら、小説を書きたいと存じてをるのでございますが……。」

「それはどうも。」と、老師は別に色には見せず、たゞ口でだけ云つて、

「わしは又、この間この鎌倉にをる人で、やつぱり若い澗石さんの弟子で、海軍の先生をしてゐる方に會つたものだから。」

「あゝ、では、柳井でございませう。杉さんに伴つて来て頂いて、お目にかゝつた話は私も聞きまして。」

「うむ。あの人は、後で何かの新聞か雑誌に、わしのことをオコゼに似てゐると云つたさうだ。魚のオコゼにな。」

さういふ老師の顔は、憤つてゐるのかと見たら、そんな氣振は勿論見えないし、さればと云つて、微笑んでゐるのでもなかつた。小野はどう答へていゝか解らなかつた。

「はあ、さうですか。」

「その人もやつぱり小説を書くのかな。」

「左様でございます。私たちとは學校以來の仲間、もう可なり新進作家としては、有名な男でございます。」

「小説といふものも、あれで、なか／＼六ヶ敷いものだらうな。——澗石さんなども、命を縮めて書かれたのだらうが、あの人のものゝ中では何が一番いゝのかな。」

「さあ、左様でございますな。色々見る人に依つて違ふやうでございますが、まづ私たちは、『そのうち』『扉』などが好きでございます。後の物でも、『路傍』などといふ大分いゝものがございますが、若しあの最後の作が完成すれば、やつぱり一番傑作ではなかつたかと、皆申して居ります。」

「あの、『明暗』かな。」と老師は、それをメウアンと發音した。「あれは禪家の語に在るが、何かさうしたものが、中に書いてあるのかな。」

「完成してないので、何とも云へませんが、先生のあの題を選んだ裡には、さういふこともあつたかも知れませんが、小説の内容としてはたゞ人事の明暗といつた位の所しか現はれて居りません。」

「本になつたら、わしも一つ讀んで見たいと思つてゐるから、送つて下さるやうに、さう頼んで下さらぬか。」

「畏りました。」

小野は何となく、この老師と、あの小説の内容とが、對照されて微笑させられた。

「あれで漆石さんのは、なか／＼禪のことなどに觸れて、書かれて在るといふ話だが、その外の日本の小説は、やつぱり自然主義などといふ戀愛物などが多いのでせうな。」

「一概にさうとも云へませんが、さういふものも、なか／＼多いやうです。」

小野は再び心の中で微笑して、抗辯する迄もないと考へて、そんなことを答へる外なかつた。

「この頃は、どうも大變な世の中になりましたな。この間も新聞で見ると、何だといふぢやありませんか。どこか淺草あたりの藝術家といふのが、二人で一人の女を、共同に所有するといふ宣言を出したといふぢやありませんか。この頃流行の共同生活とかいふのを、更に三人で實行する譯ですな。」

「へ／＼え、さうですか。」

小野もその話は、鳥渡聞いてはゐたが、そんなデカダンな街話話を彼らは一笑に附してゐたために、さうよくは知らなかつた。そして老師が、そんなことを深く問題としてゐるのに、却つて驚いた位だつた。

「さうなつては、まるで禽獸ですな。さういふのを又、デカダンとか惡魔派とか言つて、讚美する藝術家もあるさうだけれと。……尤も、貴方がたとは違ひませうがな。」

「はあ。——」小野はそんなことを云はれると、併し何となく自分の心が擦つたいやうな、他人事ならず面伏せたい氣だつた。そしてそれを辯解するやうに、心持顔を伏せて云つた。「私どもも、さう道徳堅固といふ譯には參りませんが、まあ幾ら墮落致しましても、他人の女を深く思つて、馬鹿の限りを盡す位でございませうな。」

「それならまあよくあることだから、許せないと云つても仕方がないだらうが、共同は困るな。」

「でも、二人の男が同時に、一人に惚れてゐるとすれば、何方かに一方が奪はれて了ふより、悲劇で

ないかも知れません。或ひはそれが、最も幸福な解決だつたかも知れません。」

「では貴方も、なか／＼新しい方だな。が、そんなことは、到底貴方がたに出来る譯もなからう。精實貴方がたは、一人で一人を思ひつめる位に、して置いて貰はなくちや困る。」

老師はかう云つて、笑ふのでも嘲るのでも、憤るのでも諷すのでもない、何にもない獯然たる顔付で、書院の窓から見えてゐる、斜に夕日の煙つた裏山の竹林を、眼を上げて見やつてゐた。

「私もさうありたいと思つて居ります。」

小野はその一語で何だか老師に、かすけく自分の心の戀を、是認して貰つたやうに感じて、心からさう應じたのだつた。……

やがて彼は、老師の許を辭して、裏山の日影を仰ぎながら、少し俾を待たせ過ぎたと思ひながら、門を出ようとした。と、その時、案内してくれた先刻の若僧が、下駄を鳴らして追ひかけてきて、途中の郵便函へ入れてくれと、一通の手紙を頼まれた。彼はそれを微笑と共に承知して、その太い威つ文字をちらと見ながら、何氣なく裏を返して見たら、「釋鐵枷」と署名してあつた。

待たせて置いた俾に乗つて、何となく、心持になり切りながら、彼は歸つて行つた。それは何だか彼の心も彼の戀も、すつかり淨化され、祝福されてゐるやうな感じだつた。

第七 章